

本日は『ひばり音楽教室主催 Christmas Concert 2025』にご来場くださりありがとうございます。今回のコンサートは例年以上に規模が大きく、内容も充実したものになっております。自分自身としてもベートーヴェンの4大ソナタを一晩で演奏する機会は初めてで、今日の舞台を楽しみにしていました。

ベートーヴェンのピアノソナタはピアノ演奏家にとって必ず勉強する作品であるとともに、何回弾いても新しい世界を感じさせてくれる素晴らしい作品です。小中学生のコンクール課題曲に挙げられながら、ピアニストのリサイタルでもメインに据えられる作品はベートーヴェンのソナタ以外にほとんど見当たりません。

ベートーヴェンがこれほど多くの人々に受け入れられている大きな要因は「一音一音が、人間が誰しも感じられる心の機微と深く結びついている」ということだと感じています。ベートーヴェンはまだ若い1792年、シラーの詩 "An die Freude" に会うこととなります。この詩は主語が「私 (Ich)」ではなく「我々 (Wir)」となっており、人類がひとつになる喜びをたたえる内容です。出会いから30年以上が経った1824年、後期の傑作である交響曲第9番でこの詩がベートーヴェンの音楽で色付けられました。このことからベートーヴェンが兄弟愛、人類愛を尊んでいたことが窺えます。そしてその思想がベートーヴェンの創作の軸であるピアノソナタにも反映されているのは当然と言えるでしょう。

ベートーヴェンの生涯については改めてここで紹介するまでもありませんが、ハイリゲンシュタットの遺書や作品の成立背景にまつわる数々の逸話などからベートーヴェンが常に人間としての理想を音楽で追求していたことが分かります。『不屈の精神』としばしば形容される彼の強靱な精神が、作品の音符ひとつひとつにしっかりと表れているのです。そして、人間であれば誰もが理解できる言葉で語りかけてくれるように感じます。

また、万人の心に共鳴するベートーヴェンの作品だからこそ演奏者のその時の精神が濃く反映され、そのため何度演奏しても新しく鮮やかな景色を見せてくれるのです。私がベートーヴェンの作品に特に惹かれるようになったのは高校生の頃ですが、その頃勉強した曲を数年経ってまた勉強し直すと、その時には全く感じられなかった発見や閃きがあり、ベートーヴェンの精神の深さに驚かされます。作品に正面から向き合うと、必ず応えてくれるのがベートーヴェンの作品です。

そして、コンサートの第2部ではひばり音楽教室の生徒による弦楽オーケストラが出演します。夏以降定期的な練習を重ね、音楽による対話を大切に作品の理解を深めてきました。ソリストを務める生徒やコンサートミストレスを務める生徒はその役割の責任をしっかりと理解しており、今日の舞台でも作品の素晴らしさを聴いている皆様へ導いてくれると信じています。

今日の舞台が皆様にとって、そして私自身にとって心に残る瞬間であふれるよう出演者一同準備しておりました。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

北村 川人